

第46話 (25頁) 町のネズミと畑のネズミ

気取ったネズミが、町から、気取らないネズミのところへやってきました。気取らないネズミは畑に住んでいましたので、うちにあったエンドウ豆と小麦をお客にごちそうしました。気取ったネズミはちょっとかじると、こう言いました。

「こんなまずしい暮らしをしているから、あなたやせてるのよ。うちにいらっしやい。わたしたちの暮らしを、ごらんなさいな。」

さて、気取らないネズミが遊びにきました。2ひきはゆかの下で、夜のくるのを待ちました。人間たちが食事をして行ってしまいました。気取ったネズミがすきまからお客のネズミを部屋に入れて、2ひきはテーブルの上にはいあがりました。気取らないネズミは、こんなごちそうを見たことはありませんでしたので、なにから手をつけていいのか、わかりませんでした。

気取らないネズミが言いました。

「あなたの言ったとおり、わたしたちの暮らしはまずしいのね。わたしも町にひっこしてきましょう。」

こう言ったとたんでした。テーブルがゆれだし、ドアからろうそくをもった人間が入ってきて、ネズミをつかまえはじめたのです。ふたりはやっとのことで、すきまからにげだしました。「いやいや」と畑のネズミは言いました。「畑の暮らしのほうがいいわ。あまい食べものはないけれど、こんなおそろしいことは知らなくてすむもの。」

「これもイソップ物語にもある、よく知られた話だね。畑のネズミは、暮らしが貧しくても、人間さまのご馳走にありつけなくても、やっぱり人間から捕まえられるのはまっぴらだ、と。命の危険よりも、つつましやかな暮らしを選んだ。」

「町のネズミは、命がけでぜいたくな暮らしをしている。大きな賭け、みたいな毎日だよ」

「でも、きっと町を出て行くとは言わない……」

「うーん、そうだろうな。」(一同、うなづく)

「似た話が少し前の第38話(21頁)で出てくる『オオカミとイヌ』。こっちも、イソップ物語にも出ているが、違う点といえば、飼い犬はオオカミと違って、自由を奪われていることかな。」

「とはいえ、構図とか、捉え方は同じだね。」

「町のネズミの話に戻るけど、『アーズブカ』の本文では、気取ったネズミと気取らないネズミ。随分しゃれた表現になっている。うまいな、って感心した。『イソップ寓話集』(岩波文庫、中務哲郎訳)では、田舎の鼠、さらには百姓鼠と出てくるのとは、対照的だ。」

「気取らないネズミ、という表現に、つつましい暮らしの方が好ましいと、トルストイが考えていたことが、はっきり出ているよ。」

「気取らないネズミが誘われて町に出掛け、ほうほうのていで逃げ出してきた。それ自体、自分を再発見する旅だったというわけだね。」